

## 『サクラエビ』を守っていくために今私たちにできること

由比港漁業協同組合女性部  
会計 原 千晴

### 1. 地域の概要

由比町は、駿河湾と山々に囲まれた、かつての東海道五十三次16番目の宿場町で、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた町である(図1)。農業においては、みかんやびわなどの栽培が盛んで、漁業においては、特産物のサクラエビ漁が中心で、サクラエビ漁100周年にあたる平成6年から、町では“日本一桜えびのまちづくり”を採択し、日本中にアピールしてきた。

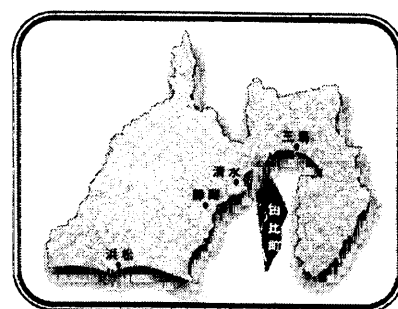


図1 由比町の位置

### 2. 漁業の概要

由比港漁業協同組合は、昭和21年に設立され、現在は正組合員292名、准組合員449名、職員21名で、由比町にある本所と蒲原町にある支所で構成されている。主な漁業としては、シラス漁などもあるが、由比の漁業といえば、なんといってもサクラエビである。サクラエビ漁は休漁期をはさんで春と秋に行われ、夜間に2艘の漁船を使った曳き網により漁獲される。サクラエビ漁業は資源管理型漁業であり、その管理は漁業者自身の手で行っている。事前に産卵調査や小型のたもを使って生育具合の調査を行い、小型のサクラエビのいるところでは網を引かないようにする他、漁獲量を制限し、総水揚げ額を共同分配することで乱獲を防ぐプール制が導入されている。

由比港漁協の近年の年間水揚げ量はおよそ2千tで、年間水揚げ金額はおよそ30億円であるが、水揚げ量の約8割、水揚げ金額の約9割近くをサクラエビが占めている(図2及び3)。

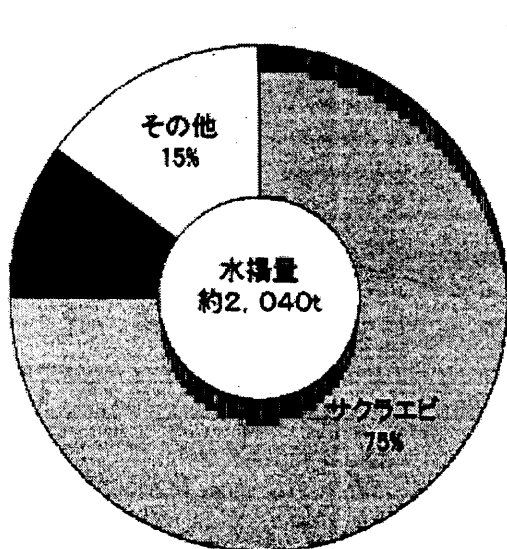


図2 近年の魚種別水揚げ量

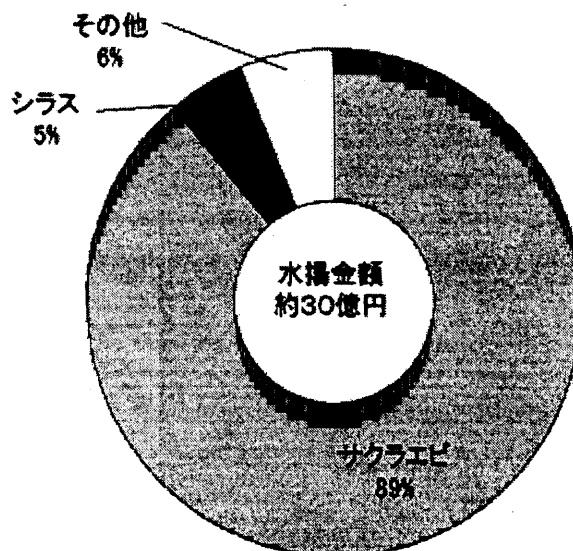


図3 近年の魚種別水揚げ金額

### 3. 研究グループの組織及び運営

由比漁協の女性部は、昭和31年に由比町の本所と蒲原町の支所にそれぞれに設立さ

れ、当初から個々に活動してきた。私が所属する由比港漁協女性部は現在部員が54名で、えび網組合女性部としらす組合女性部により構成されている。役員任期は2年で、えび網組合女性部から8名しらす組合女性部から3名が選出され、計11名で各事業を推進している。

主な活動は、地域のイベントなどにおけるサクラエビのPR、清掃などのボランティア活動、子供たちへの魚料理の普及、サクラエビの漁期中のみ開店する漁業者向け売店の営業、セリが終わった後のエビ箱洗いである。

#### 4. 研究・実践活動課題選定の動機

私たち由比の漁業者にとってサクラエビはかけがえのない宝物であり、この宝を子や孫の代までずっと残していかなければならない。

そのためには、サクラエビを大切に利用しなければならない。資源管理に力を入れることはもとより、漁業者だけでなく広く町民にサクラエビを上手に食べていただくことによって、サクラエビを身近なものとして感じてもらい、由比の特産物として誇りを持ってもらいたいと私たち女性部は考えた。そのためにはサクラエビの食文化、とりわけ由比に伝統的に伝わるサクラエビの食文化を若い世代に伝えていくことが重要となる。由比にはサクラエビ漁が行われ始めたころから伝わっている伝統的な郷土料理がある。「さくらえびの沖あがり」である。寒い冬に体を温めるには最適の料理であるが、広く地元の人々に知られているものではないため、由比の伝統的な料理として広めていきたいという思いがある。

また同時にサクラエビの生息している環境を守らなければならない。私たちは過去に田子の浦のヘドロ公害という大きな問題を経験している。近年もゴミ問題や生活廃水など環境問題となりつつあるものがあるが、私たちの中には二度とこの環境問題を繰り返してはならないという思いがある。

サクラエビという宝を後世に伝えていくために、サクラエビの伝統ある食文化を若い世代に広め、またそのサクラエビの生息環境を守る何らかの行動を起こすことが必要ではないかと考え、今回の活動を実施することにした。

#### 5. 研究・実践活動状況及び成果(効果)

##### (1) 「さくらえびの沖あがり」の普及

もともと「沖あがり」とは、サクラエビ漁を終えて帰ってきた乗り子さんたちの労をねぎらうために、船元の家で招待されて開かれた宴会のことである。そのときに乗り子さんたちの冷えた体を温めるために振舞われたサクラエビと豆腐の煮物のことを現在では「さくらえびの沖あがり」と呼んでおり、漁師の家々に伝わる伝統料理として親しまれてきた。以前は漁業者が行うイベントなどではよく振舞われていたものだが、かかる手間などの問題から、近頃ではかき揚げが主に使われるようになってきている。私たちはこの料理を広めることによってサクラエビをもっとよく知ってもらい、大切に食べてもらえるのではないかと、ひいてはサクラエビを大切に、後世まで残すことができるのではないかと考え、この「沖あがり」をさまざまなイベントなどで提供し普及に努めてきた。

中でも印象が深いのは昨年6月に行われた私たち漁業者と地元の小学生との交流会である(写真1)。この交流会は、サクラエビの事を子供たちによく知ってもらわなければならないということで行われたものである。まず漁のことを知ってもらうためにサクラエビ漁船の体験乗船が行われたが、私たちは、サクラエビの料理の中でもこの地域で伝統的な料理である「沖あがり」を子供たちに知ってもらおうと、体験乗船を終えて戻ってきた子どもたちに、「沖あがり」を振舞った。当日はあいにくの雨となり、非常に寒い日であったが、子どもたちは振舞われた「沖あがり」を大変おいしそうに食べてくれた。子供たちは冷えた体を温めるという「沖あがり」の持つ本来の役割を実感してくれたのではないと思う。部員一同この料理を残していくことの重要性を改めて実感した。

このほかに、全国放送されたお酒のコマーシャル撮影の合間にも「沖あがり」を作って撮影スタッフに振舞った他、さまざまなイベントで実演、配布を行った。



写真1 小学生との交流大会で振舞われた「沖あがり」

(2) サクラエビの棲む環境を守るために

サクラエビの棲む環境を守るために私たちに今できることは、とても小さな事かもしれないが、この小さなことの積み重ねによって環境を守ることができればと考えている。

毎月1度実施しているものに港の清掃活動がある(写真2)。港湾利用者が気持ちよく利用できる様にと、20年以上も続いている伝統活動である。部員54人が6班に分かれて港全体を清掃する。毎回町指定のゴミ袋に10~20袋程のゴミが集められる。港は一時的にきれいになるが、残念ながらゴミの減量化へはつながっていない。

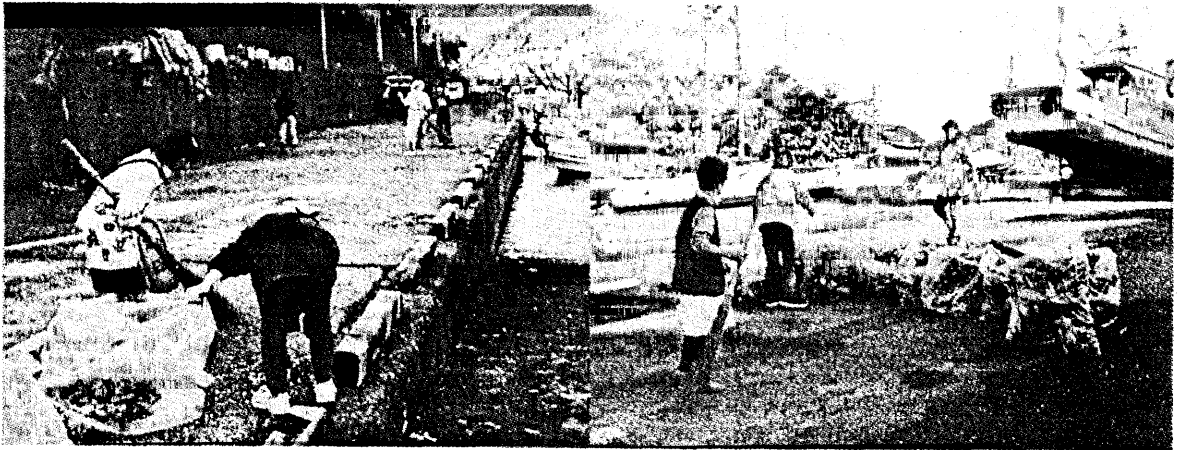


写真2 港の清掃活動

また県漁連が主催する植林活動に積極的に参加している(写真3)。川から海へと運ばれる森の養分は、植物プランクトンや海藻を育て、サクラエビなど海の動物たちが住みやすい豊かな海をつくる。この栄養豊かな水を与えてくれる森を育てなければならないとの思いから、15年度から静岡市の北部にある口坂本地区の植林活動に参加している。今年度は15年度に植えた木を保護するための下草刈り、整備活動に従事した。私たちにできる事はたった1本の植林かもしれないが、一人一人の小さな力も数が集まれば大きな力となる事を信じて活動に参加した。



写真3 植林活動に参加

さらに『かけがえのない海を守る為に、今私たちにできる事』と題し、講師の先生を招いて、部員全体で勉強会を開いた(写真4)。見せていただいたビデオは、現在の汚れた駿河湾にある大瀬崎の様子だった。以前はサンゴ礁が広がり、大小様々な魚が住んでいた海が、今は明らかに様変わりし、人々が何気なく捨てたと思われるゴミが漂着し、生活廃水によるヘドロ状のチリで覆われ、魚の棲める海ではなくなっていた。部員一同かなりのショックを受けた。また合成洗剤のこわさについても勉強した。合成洗剤の特性を理解し、『わかしお石鹼』など生物環境を考えた石鹼を使用する様呼びかけ、日常生活における意識の向上を図っていきたいと思っている。



写真4 環境について勉強会

## 6. 波及効果

「沖あがり」は交流会に出席してくれた児童に大変喜ばれた。引率した先生も興味をもち、この作り方を覚えていくほどであった。後日児童が書いてくれた日記の中にも「おいしかった」という声が多数あった。またイベントでも好評であり、テレビ番組などでもこの「沖あがり」が取り上げてもらうようになった。サクラエビを大切にするために、資源管理は漁業者が行うことであるが、サクラエビを上手に食べてもらうことは、私たち漁業関係者だけでなく、地元由比のみんなで取り組まなければならないことである。その一歩として子供たちが由比の伝統的な料理に興味を示してくれたことは大変喜ばしいことである。一方環境問題については、部員の中に河川や海の汚染についてかなり認識し、個人的に以前からその対策に工夫している者もいたが、大半はまだ合成洗剤のこわさを知らずに、便利さゆえに利用しているようであった。勉強会により、『わかしお石鹼』などの石鹼の利点が理解でき、サクラエビのすむ駿河湾を守るために、“部員全体で”というより“町ぐるみで”取り組む必要があるという意識が持てた。

## 7. 今後の課題や計画と問題点

「沖あがり」を後世に伝えていくためには、子どもに興味を持ってもらうだけではな

く、その親の世代にも興味を持ってもらわなくてはならない。最近では料理をしない家庭が増えてきているといわれているが、色々な機会に「沖あがり」を食べていただいてPRしていくと共に、料理教室を開いて紹介するなど、母親たちにこの料理を覚えていただきたい。一方港の清掃で集められるゴミは、一般釣り客なども含めた港湾利用者の捨てたゴミであり、また森を育てる事や生活雑排水を変える事にしても、私たちだけの活動には限界がある。部員一人一人が意識し、取り組んでいくことはもちろんだが、このことを周囲の人々にいかに広めていけるかということが重要になる。今私たちにできる事を意識して、すぐにできる事から取り組み、サクラエビの食文化とサクラエビの棲む環境を守るために、町ぐるみでがんばっていけるように、今後も活動に取り組んでいきたいと思う。